

20. 和徳町 [わとくまち]

元禄9年(1696)の家臣の城外移転に伴い、和徳村の一部が移転して作られました。江戸時代末期には和徳櫓形も設けられ、青森に至る街道筋であったため、商家の町並みも形成されてにぎわいを見せました。

21. 元大工町 [もとだいくまち]

築城の際に、大工職人をこの地に住まわせて大工町としていました。その後は家臣の城外移転に伴い、大工職人は現在の西大工町に移り、元禄13年(1700)には元大工町として藩医や町医者などの住む医者町の町になった時代もありました。

22. 本町 [ほんちょう]

藩政初期から鍛冶や銅屋の職人町で、著名な刀工が住んでいたことから本鍛冶町と呼ばれ、この略称から本町となりました。宝永2年(1705)、城の大手が北門(亀甲門)から南門(現 追手門)となっってから、豪商が軒を運ねる商人町となりました。

23. 鍛冶町 [かじまち]

刀や鎧を作る鍛冶職人は、合戦になれば最初に城内に呼び入れるため、当初は寛仙町や本町に町割りされていました。しかし、江戸中期ころから日用雑器や農工具を作るようになったため、現在地に移りました。

24. 土手町 [どてまち]

築城当初は東側から城下に入る唯一の通りで、土淵川の西端に堤が築かれていたことから土手町と呼ばれるようになったといわれています。貞享2年(1685)から参勤交代の通路となり、商人町として発展しました。

25. 瓦ヶ町 [かわらけちょう]

城内で使用する瓦を作っていた「御瓦屋」があったところから名付けられました。元禄時代の家臣の城外移転に伴い土淵川の東地区で土手町とともに町割りをされた下級武士団の居住区で、現在は上・中・南・北の各瓦ヶ町があります。

26. 代官町 [だいかんちょう]

藩政時代中期には津軽領内には18もの代官所がありました。一つの代官所には二人の代官が交代で勤めていましたが、これらの代官の住む屋敷がこの通りにあったことから、町名が付けられました。

27. 茂森町枺形 [しげもりまち ますがた]

城下町の道路は、敵の侵入を困難にするさまざまな工夫がされていましたが、見通しを妨げ、直進できないように二重の曲がり角をつけた枺形もその一つです。ここは弘前城の出城構の長勝寺構に当たるため、特に設けられたといわれています。

28. 在府町 [ざいふちょう]

在府とは、大名や家臣が江戸で勤務することで、藩政時代初期には足軽町と呼ばれていました。やがて江戸で召し抱えた侍を弘前に連れてきたとき、この地に住ませたので在府町と呼ばれるようになりました。

29. 新寺町 [しんてらまち]

慶安2年(1649)に、弘前城東方の寺院街の一角(現 元寺町)が焼失したのを機に、15ヶ寺の寺院を移転し現在地に寺院街をつくりました。このため新寺町と呼ばれるようになりました。

30. 桶屋町 [おけやまち]

寛文13年(1673)ころは、新しくできた町として町割りされ、元禄13年(1700)には桶屋町と呼ばれていました。桶や樽などを作る職人が多く住んでいたことから名付けられたものです。

31. 銅屋町 [どうやまち]

藩政時代初期には、本町付近に町割りされていましたが、元禄9年(1696)ころに現在地に町ができました。日常生活用具の鍋や釜などを作っていた職人が住んでいたことから名付けられたものです。

32. 紙漉町 [かみすきまち]

貞享3年(1686)に、紙漉師の熊谷吉兵衛を招いて、紙漉きに適した清水の湧くこの地に紙漉座を設けたことにちなんで名付けられました。しかし、明治になると紙漉きは衰退し、現在は町名に名残りを留めるだけとなりました。

33. 茂森町 [しげもりまち]

慶長8年(1603)に亀甲町などとともに最初の町並みとして、更に城の南西の要所として町割りされました。町名は、近くにあった重森山にちなんで名付けられたといわれています。

34. 楮町 [こうじまち]

楮は紙を漉く材料です。町は紙漉座のために楮を植えたのが始まりで、やがて町割りが拡張され、家が立ち並ぶようになり、元禄13年(1700)に楮町と名付けられるようになりました。

35. 松森町 [まつもりまち]

貞享2年(1685)、参勤交代の通路となった碓ヶ関街道の両側には松並木が設けられました。この松並木の手入れをする「松守り」を住ませたことから名付けられました。

36. 枺形 [ますがた]

城下町の道路は、敵の侵入を困難にするさまざまな工夫がされていましたが、見通しを妨げ、直進できないように二重の曲がり角をつけた枺形もその一つです。ここは城下の南東の出入口の守りで、古くは富田町枺(升)形と呼ばれていました。

37. 樋の口町 [ひのくちまち]

天文年間(1532～1555)の史料に「樋口」の地名が見られ、延宝2年(1674)などの岩木川の堰き止めにより、その支流であった樋ノ口川は田畑に姿を変え、弘前城下からの入作者も多かったところでした。

38. 春日町 [かすがちょう]

宝永8年(1711)、弘前城の西北端に当たる馬喰町の北側に町割りされた典型的な侍町です。現在も同所にある春日宮は、宝永5年(1708)に建立が計画されて延享2年(1745)に完成したもので、町名はこのお宮に由来します。

39. 寛仙町 [かくせんちょう]

慶安2年(1649)には10軒の鍛冶屋があり「かち町」と呼ばれましたが、町内にあった修験の寺院の寛勝院にちなんで、元禄13年(1700)の侍町屋敷割には寛勝院前之町と見え、やがて寛政年間(1789～1801)に現在の町名に固定しました。同町に住んだ国吉家・森宗家・国広家は津軽の刀匠として著名です。

40. 茶畑町 [ちやばたけちょう]

寛政12年(1800)の弘前分間大絵図に武家屋敷が配置されており、町名は屋敷割がされる以前に、茶畑があったことに由来するといわれます。幕末に町割の変化が見られ、文久3年(1863)には江戸で勤務していた武士を帰国させるために長屋が建設されました。

41. 駒越町 [こまごしまち]

ここは弘前城下から、藩祖為信の居城であった大浦城跡や岩木山神社に続く通りで、駒越川(現 岩木川)には橋がなく駒越渡しと呼ばれた渡し場がありました。貞享元年(1684)ころに町屋として町割りされ、酒造や雑貨商などが軒を連ねて栄えてきました。

ひろさき古町名標柱マップ

○古町名標柱によせて

津軽藩政の中心地であった城下町『弘前』には、城下町特有の由緒ある古い町名が数多く残されており、町名は、地形やそこに住んだ人の職業などに由来するものも多く、まちの歴史を語る証人といえるものです。

この標柱の説明と設置場所の略地図を、みなさんに活用していただき、弘前の町の歴史を感じていただければ幸いです。

<div><div><div></div><div>ひろさききょういくいんかい</div></div></div> <div><div><div></div><div>弘前市教育委員会</div></div></div> <div><div><div></div><div>ぶんかざいほごか</div></div></div> <div><div><div></div><div>文化財保護課</div></div></div>	
<div><div><div></div><div>弘前市大字賀田1丁目1ー1</div></div></div> <div><div><div></div><div>弘前市役所岩木庁舎3階</div></div></div> <div><div><div></div><div>電話：82-1642</div></div></div> <div><div><div></div><div>FAX：82-2313</div></div></div>	

1. 浜の町 [はまのまち]

参勤交代のとき、もとはここを経て鯉ヶ沢に至る西浜街道を通過って、秋田領に向かっていました。町名は、西浜に通じる街道筋にちなんだと思われませんが、宝暦6年(1756)には藩の蔵屋敷が建てられ、「御蔵町」とも呼ばれました。

2. 紺屋町 [こんやまち]

藩政時代初期から染物屋の町として町割りされ、百軒以上もの染物屋が建ち並んでいました。当時は、染物といえば藍染めであり、染物屋のことを「紺屋」と呼んでいたことから、町名となったといわれています。

3. 亀甲町 [かめのこうまち]

慶長8年(1603)からの弘前城築城と城下町の建設に際して、最初に町割りされました。町名は、城を守る東西南北の四神のうち、北の神である玄武(甲羅があり姿が亀に似ている想像の生き物)にちなんで命名されたと伝えられます。

4. 桶宜町 [ねぎまち]

弘前城築城とともに町割りが行なわれ、弘前総鎮守八幡宮の神官(桶宜)と、別当叢勝院の僧侶たちが多く住んだことから、町名になったといわれています。八幡宮への参詣道として、門前町を形成していたところです。

5. 田茂木町 [たもぎまち]

元禄年間(1688～1704)に、家臣の城外移転のために町割りされました。元文4年(1739)8月の大風で、町内の山王神社(現 大杵神社)の御神木の田茂の木が倒れたという記録があり、町名はこの木に由来するといわれています。

6. 五十石町 [ごじっこくまち]

慶長16年(1611)の弘前城完成に伴い、城の西側を守る中級武士の住む町として町割りされました。このときに五十石町と名付けられて以来、変わることなく現在まで使われている町名です。

7. 大浦町 [おおうらちょう]

初代藩主為信が津軽氏と改称する以前の姓が「大浦」でした。藩政時代初期は城内の一角に大浦町を町割りしていましたが、後に現在地に移転し、藩政末期まで重臣たちが住んでいたところです。

8. 蔵主町 [くらぬしちょう]

藩政時代初期は町家として町割りされ、「蔵人町」と呼ばれていました。その後早い時期に侍町に変わり、「蔵主町」と文字が変わり、後に現在のように呼び方が変わりました。

9. 笹森町 [ささもりちょう]

当初は、弘前八幡宮への表参道であったため「八幡町」と呼ばれていました。慶安年間(1648～1652)のころ、篠森勘解由という豪傑な武士が住み「佐々森町通り侍町」と呼ばれ、元禄時代に現在のように変わりました。

10. 新町 [あらまち]

当初は岩木川原も含み、山師や木場人足が住むほか、造り酒屋などのある商工業の町で、人足の気性の荒さや川の氾濫から「荒町・阿羅町」と書かれました。寛文5年(1665)までは江戸への道筋で、南北の町並みを江戸町とも呼びました。

11. 鷹匠町 [たかじょうまち]

藩政時代初期は武士のほかに多くの鷹匠が住んでいたところで、丁・町と呼び方が変わったものの、以後一度も町名変更がなかったところです。津軽藩は鷹の産地で、豊臣秀吉や歴代の徳川将軍に鷹狩り用の鷹を献上していました。

12. 馬屋町 [まやちょう]

築城当初は城の一郭で、「西外曲輪」と呼ばれ、百石取りの侍屋敷と藩主や家臣の馬を慣らす馬場や厩がありました。江戸時代中期になると厩は少なくなります。これにちなんで呼ばれるようになります。

13. 白銀町 [しろがねちょう]

藩政時代初期は片原町と呼ばれていましたが、慶安3年(1650)にはすでに白銀町と改名されています。金銀細工の職人が多く居住したところから名付けられたといわれ、明治時代に上・下白銀町に区分されました。

14. 親方町 [おやかたまち]

藩政時代初期に馬で荷物を運ぶ荷駄方人足の親方衆が住むところとして町割りされました。当初は現在の倍ほどもある大きな町でしたが、宝永3年(1706)ころの町替えによって今のような姿になりました。

15. 元寺町 [もとてらまち]

藩政時代初期は、寺町と呼ばれる寺院街でしたが、慶安2年(1649)に数ヶ寺が焼失したのを機に、翌年からすべての寺院が新寺町に移転されたため、商人町に変わりました。

16. 鞆師町 [さやしまち]

刀の鞘を作る職人にちなんで付けられた町名で、築城当初には寺町の一画でしたが、元禄9年(1696)の町割帳に鞆師町と改称されています。後に南通りを上鞆師町、北通りを下鞆師町と呼び、現在に至っています。

17. 百石町 [ひゃっこくまち]

藩政時代初期は武士の居住する町を単に侍町と呼び、ここもその一つでした。最初は馬屋町の一部に付けられた町名でしたが、それが二百石町と改称されて現在地が百石町と名付けられました。

18. 徒町 [おかちまち]

藩政時代初期は、現在の若党町に「歩ノ者町」として町割りされましたが、万治2年(1659)に現在地を「御徒町」として新たに町割りされました。町名の表記では御歩行町も見られますが、明治時代に徒町と書かれるようになります。

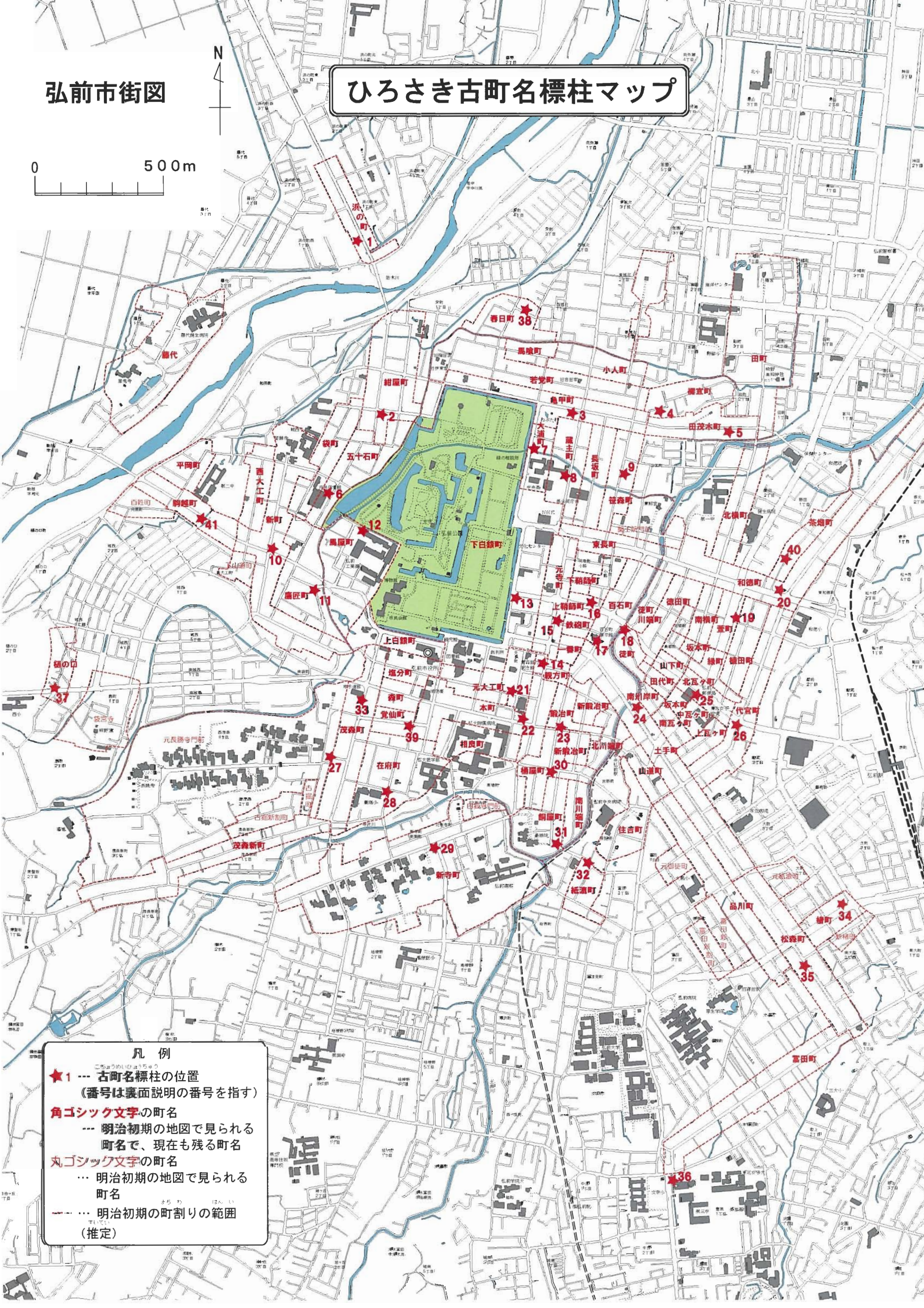
19. 萱町 [かやちょう]

正徳元年(1711)に南横丁の新割り屋敷としてつくられ、主に下級武士が住んでいました。町名の由来は、町割り以前は田園地帯で、カヤが群生していたことによるといわれています。

弘前市街図

ひろさき古町名標柱マップ

0 500m



凡例

- ★1 --- 古町名標柱の位置
(番号は裏面説明の番号を指す)
- 角ゴシック文字の町名
--- 明治初期の地図で見られる町名で、現在も残る町名
- 丸ゴシック文字の町名
--- 明治初期の地図で見られる町名
- 明治初期の町割りの範囲
(推定)